京都

剣鉾のまつり

調査報告書
〜映像編解説書〜

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会
2014

文化庁
Agency for Cultural Affairs

平成 25 年度 文化遺産を活かした地域活性化事業

京都

剣鉾のまつり

調査報告書

～映像編解説書～

はじめに

祇園祭の山鉾巡行は，京都の夏に欠かせない風物である。その鉾と起源を同じくする，もうひとつの鉾の祭りがある。その鉾は，総称して剣鉾と呼ばれているが，その実態は明らかではなかった。

そもそも，剣鉾という語が京都においても，一般的ではなく，昭和60年頃の京都市の調査の過程で総称として定着していったものである。地域での呼称は，あくまで菊や龍といった意匠を冠して呼ばれるものであった。しかし，稀ではあるが鉾の箱書等に，意匠に関わらず剣鉾と表記されていることがあり，近世から明治にかけて，剣先が菱型に尖った剣を掲げる鉾という，造形上の共通点が認識されてきたことは明らかである。

京都市が京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会を組織して，平成22年度から24年度にかけておこなった調査では，剣鉾そのものだけでなく，剣鉾を伴う祭礼行事の調査を，民俗学，民具学，文献史学その他の多角的な視点から調査し，その源流を探り，歴史的展開を明らかにし，剣鉾の定義についても再検討を試みた。その具体的な成果については，本書において明らかにしているところであるが，本書の活用にあたって，まずその要点について，示しておきたい。

剣鉾とは，単にその造形によるものではなく，祭礼行事と一体で理解すべきものである。剣鉾の本来の目的は，祇園祭と同じく，御霊信仰における呪具であり，高く掲げられた鉾先の剣が前後にしなることにより，輝くことで，周囲の悪霊を集め浄める役割がある。合わせて，リズミカルな音を響かす鈴や，たなびく吹散なども，呪具としての要素として付与されたものである。

もう一つ重要なことは，これも祇園祭と共通するところであるが，神社の祭具ではなく，鉾仲間もしくは鉾町といった，氏子地域のなかの有志の集団や地縁組織によって護持され，神輿の巡幸の先導を務めるということである。

このような典型的な「剣鉾のまつり」は，上御霊神社，下御霊神社，岡崎神社，須賀神社など，御霊をまつる神社に伝えられてきたが，その祭具としての華やかさが注目されて，京都の市中および京都近郊の村落にも広がっていった。いわば，「剣鉾のまつり」の再生産がなされていったのである。その勢いは京都周辺に止まらず，全国各地に伝播していったが，本来の剣鉾の在り方とは異なったもの，造形上の特徴のみが伝承されているものがほとんどである。

本書では，剣鉾および剣鉾の伴う祭りの全貌を明らかにするため，京都市内については，剣鉾と考えられてきたものについて，すべてを調査対象とした。そのため，このような本来的な「剣鉾」および「剣鉾のまつり」と，再生産されたものという二重構造であることを明らかにすることができた。これらは，来歴や伝承母体の性格が異なるものの，いずれにしても，京都において重要な祭礼文化，地域文化である。

本調査の成果が，京都市民の誇りとして，これらを活かした地域振興，地域活性化が進むことを願っている。

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会
委員長　植木 行宣

例　言

調査事業と報告書

1　本報告書は，京都市が設置した京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会による剣鉾調査の成果をまとめたものである。本事業の推進は，文化庁の補助事業として実施した。

平成 22 年度	**地域伝統文化総合活性化事業**（委託事業）
平成 23・24 年度	**地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業**
平成 25 年度	**文化遺産を活かした地域活性化事業**

報告書の構成・体裁

2　本報告書の構成は次の通り。

①論説編　A4 判　カラー

②民俗調査編　A4 判　モノクロ

③資料編（歴史資料 , 銘文・箱書 , 計測数値）　A4 判　モノクロ

④資料編（剣鉾計測カード）　PDF　データディスク

なお，①～④の PDF については，カラーで④のデータディスクに収めている。

調査対象

3　京都市内については，造形上，剣鉾の特徴をもつもの，これまで剣鉾と考えられてきたものについて，すべてを調査対象とした。

4　市外の事例についても比較対照するための参考として，委員および調査員に寄稿いただいた報告も，本調査報告書に掲載した。

映像記録

5　本報告書と同時に，映像記録（映像編）も作成した。

⑤民俗誌映像「祭りに生きる　京都の鉾差し」BD ビデオ　76 分

⑥技術映像「剣鉾の組み方と差し方」　BD ビデオ　146 分

⑦マップ映像「京都の剣鉾差し」　DVD ビデオ　88 分

⑧映像編解説書　DVD ジャケット判　モノクロ

過年度の成果物

6　本事業に関わって，本報告書の発行以前にまとめた成果物は次の通り。

平成 22 年度

『京都の剣鉾まつり』（A5 判　モノクロ　157 頁）

平成 23 年度

『京都の剣鉾まつり 2「差革」編』（A5 判　モノクロ　39 頁）

『差革の作り方―差革製作講習会の記録』（DVD ビデオ　34 分）

本報告書に掲載されていない情報もあるため，適宜参照していただきたい。

その他

7　参考文献等一覧および調査体制は①論説編の巻末にのみ掲載し，用語解説は①論説編および②民俗調査編の巻末に掲載した。なお，各巻の執筆者一覧は，それぞれの巻末に掲載した。

目　次

はじめに …… 2

例　　言 …… 4

Disk-1 民俗誌映像「祭りに生きる　京都の鉾差し」

- 剣鉾と映像 ……大森　康宏　7
- クレジットタイトル …… 14

Disk-2 技術映像「剣鉾の組み方と差し方」

- 「剣鉾の組み方と差し方」について ……福持　昌之
  葛西映吏子　15
- クレジットタイトル …… 25

Disk-3 マップ映像「京都の剣鉾差し」

- マップ映像「京都の剣鉾差し」について　　鈴木　岳海　26
- クレジットタイトル …… 38

付　篇 …… 43

監修・執筆者一覧 …… 52

表紙写真：西院春日神社の春日祭 西大路四条
（2011 年 10 月 9 日、福持昌之撮影）

Disk-1 民俗誌映像「祭りに生きる　京都の鉾差し」

剣鉾と映像

大森　康宏

映像による剣鉾とは

映像を活用した民族学あるいは民俗学においては，現場での出来事を記録・収録することによって，撮影時点での事象を視覚的に再生することができる。従って他の場所で撮影した同じような事象の映像記録と比較研究することが可能であり，さらに過去に記録された映像と比較して事象の変化そして変遷を研究することが出来る。今回の記録映像は将来の鉾差しの映像と比較検討できることを予測して制作された。

事象のなかでも剣鉾のまつりの行程そのものの簡素化などは映像の記録によって発見しやすい研究であるが，それに加えて，言葉では説明しにくい，祭りにかかわる所作の解明や仕草の意味など，非言語による身体表現の部分を映像記録することでより精緻に研究を補うことが出来る。

この度の剣鉾の総合的な調査には，民俗誌映像として剣鉾まつりの一連の過程を撮影し記録映像を制作することが要請された。この企画とは別に，鉾差しの技術を比較するための［剣鉾差し］に限定した映像，そして地域ごとの鉾差しを地図上で比較して

近世の鉾差し
（出雲路通次郎編『下御霊神社誌』
下御霊神社 1907 より澤瀉鉾の図）

示すマップ映像の制作などが企画された。

今回筆者に要請された映像制作は，鉾の差し方や鉾の組み立てなどの剣鉾のまつりの過程の詳細な記録映像よりも，鉾差しと呼ばれる鉾を差す人を中心として，地域社会の祭礼行事と剣鉾の関わりや，その人間関係の実態を記録することに重点を置いて制作に努めた。そのことによってこのまつりにおける剣鉾の役割や意味，人間関係と社会連携が浮かび上がるように映像を構成してみた。

とりわけ重要なことは，将来，過去のものとなるこの映像記録が，来るべき時代の社会集団にとって様々な有機的な意味ある関係が重要視されたとしたら，今回の［記憶］としての映像記録が重要性を持つこととなろう。ただし映像記録からいかに，またどのように［記憶］を再構築するかは次世代の研究者にゆだねることとなろう。

御霊信仰における呪具と鉾差し

剣鉾は，本来，神社の祭具ではなく御霊信仰における呪具であり，氏子のなかの鉾仲間や鉾町などの家によって護持されてきた。そのなかには，剣鉾の巡行や維持管理のための田地を持っているところもあった。それらを構成する家々が毎年順番に当屋を勤めて，剣鉾のまつりの準備をし，剣鉾の巡行のために、鉾差しを招聘する。

本来，鉾差しは祭礼行事にかかわる地域以外の人に依頼するのが主流であった。鉾差しに求められる役割は，神輿の巡幸をともなう神幸列の道筋にそって剣鉾をたゆませて先行し，浄めることであった。つまり鉾の機能としては，蔓延する疫病神を吸収する依代として神幸列のなかで重要な役割を果たしている。神幸列を構成する様々な祭具のなかでも，剣鉾だけが当屋から出されるものであり，特別な待遇をうける。剣鉾とそれ以外の氏子たちとは何か特別な関係が存在するようだ。疫神を集める美しい鉾先を操る人，この鉾差しは，あとに続く祭礼関係者とは直接関わることはない。その祭りの神事行事とも関わることはない。ただひたすら聖なる道のために先払いを勤め巡行する，また，祭礼行事とゆかりの深い家の門前など浄める。

須賀神社の当屋に飾られた剣鉾
（2012 年 5 月 13 日，福持昌之撮影）

制作された映像を見ても判明するように，鉾差しは鉾を所有する鉾仲間や当屋と関係する氏子の仲間から選ばれたものではなく，専門家として依頼された人たちである。それは京都の岡崎から一乗寺にかけての東山山麓に住む植木職人たちが多かったと言われている。

つまり疫神を集めて追い払う勤めを担う人たちは，祭礼行事と関係ない遠方からやってくる人たちで，記録にも残らない人たちであった。

現在，剣鉾のまつりが見直され，地域や職業にとらわれない鉾差しも増えつつあるが，こういった系譜を受け継いだ鉾差しは少なくなってきている。そこで，今回の映像では，若王子の植木職人として代々鉾差しを束ね，現在も造園業を営む藤田修氏に焦点を当てて，撮影を実施した。

撮影記録位置

完成映像作品に組み込んだ撮影地を記述する。

・下御霊神社（中京区下御霊前町）
2011 年（平成 23 年）5 月 22 日

・春日神社（右京区西院）
2011 年（平成 23 年）10 月 9 日

・須賀神社（左京区聖護院）
2012 年（平成 24 年）5 月 6 日
・藤田修氏の植木仕事（下鴨神社・鴨脚家）
2012 年（平成 24 年）7 月 24 日

2011 年の下御霊神社の巡行では，悪天候のため撮影が困難となり，インタビュー中心の記録映像となった。翌年の 2012 年に藤田氏の鉾差しを撮影した。藤田氏は東山区をはじめ西院の春日神社，伏見の藤森神社などを管轄しているが，年齢のこともあり，本人自身が鉾を差すのは上記３カ所だけであった。

西院春日祭の剣鉾は氏子地域の５カ所の鉾仲間がそれぞれ，その年の当屋を決めて，藤田氏に鉾差しを依頼している。しかし接待などは春日神社の社務所において，合同で行っている。

左京区聖護院の須賀神社春期大祭では，かつては鉾仲間が組織されていたが，現在は３軒の八ツ橋屋が毎年当屋を勤める。接待は３軒で料理屋を貸し切り，藤田氏の仲間を招待している。特筆すべきは，このうち１軒は，今も藤田氏のために風呂を沸かして御接待をしていることである。かつては接待の一部として風呂あるいは銭湯の提供は，剣鉾のまつりでは普通に行われていた。

下御霊神社では町の集会所に設置された剣鉾を差すために藤田

下御霊神社の御霊祭　讃州寺町
（2012 年 5 月 13 日，福持昌之撮影）

西院春日神社の春日祭 社務所での食事会
（2011 年 10 月 9 日，福持昌之撮影）

須賀神社の当屋で汗を流す鉾差し
（2012 年 5 月 13 日，福持昌之撮影）

下御霊神社の御霊祭　鉾差し
（2012 年 5 月 20 日，福持昌之撮影）

氏の仲間が呼ばれた。接待は特になかった。

鉾仲間や鉾町など，鉾を護持して鉾差しを迎える人たちも，転出や後継者問題，あるいは，接待の煩わしさなどから鉾仲間から抜けたりしてその家数は減少している。

鈴の音と吹散

鉾にはさわやかな音を発するリン（鈴）が付いている。疫神が食らいつくためには，決して鈍い音がしてはならないものであり，かつ音を聞くものにとって爽やかでなければならない。そのためにもリズムをつけて，リンを鳴らしている。しかもそのリズムは鉾先の金色に輝く剣の前後の揺れ方と一致しなければ，視覚的にも聴覚的にも疫神を呼び寄せ，剣先から疫神を追い出すことが出来ない。

吹散は様々な絵柄のある布を使用しているが，古くから描かれた剣鉾のどの絵を見ても見事に風にたなびいている。後世，吹散の多くは，華美な装飾が施され，かなり重さのある布となった。その影響もあってか，吹散を剣鉾から外して立派な箱に収め，宝物の一種として剣鉾の後について運ぶ例も多い。それでも，拝殿廻りなど特定の場所では，吹散を剣鉾に取り付けていることから，それが本来の姿であることは今も確かに伝承されている。重い吹

散は，鉾差しの思惑通りに美しく見せることは困難であり，低い位置で広げるように工夫され，披露されている。

鉾差しの身体技法、時間と空間

剣鉾を差す人は鉾の棹を支える腰の安定と，前進する足の踏み込みが重要とされる。それによってリンの鳴りも剣の揺れかたも違ってくる。それ故，専門の鉾差しは客人（まれびと）と同じくらい大切な人と考えられたのであろうか。疫神を集めて追い出してくれる人として当屋をもうけて，差し手を丁寧にお迎えして，かつ接待して送り返す。鉾差しは神輿よりも先に進み疫神を集めて追い出すことから，鉾差しは疫神よりも強靭であることが期待され，かつ，しかも大地を浄める義務が課せられている。

リンと鉾先の揺れが一致し，鉾差しのリズムがうまく継続する時，集まった観衆とのあいだに張りつめた一線が引かれる。それは誰もが剣鉾から一定の距離をとることで出来上がる聖なる空間でもある。

西院春日神社の春日祭
西大路四条
（2011 年 10 月 9 日，
福持昌之撮影）

この空間は剣鉾まつりから神社の祭りへと演出する舞台装置である。この舞台の鉾差しの演出が優美で荘厳であればあるほど，フィクション性の強いものとなり非日常の時間と空間を創造する。そのなかで観衆は疫神を追い出す霊力を実感するのである。

しかし社会システムが時間の短縮と有効性を追求するようになるとともに，鉾差しを招く煩わしさが忌避され，神輿の先頭が清められることもなくなる風潮がある。かつて鉾が演出した聖空間を共有した観衆の地域社会は，次第に歯車が狂ったように崩壊していくように思える。

こうした社会的要請をうける鉾差しは，祭りの神事よりも大切な役割を持つ人として重要視されるべきであろう。

まとめ

今回の撮影対象とした藤田修氏は，昔からの伝統を引き継ぐ剣鉾のまつりの巡行を行う東山系の代表的な人物である。彼は後継者問題について様々な解決方法を考えている。とは言え性急に鉾差しの組織を構築することに賛成ではなく，鉾差しに興味を持ちその教えを請う人には手厚く伝授し，まつりの時に依頼があればそれに応じられる態勢さえあればいいと考えている。したがって謝礼についても鉾差し側から均一料金を提示するようなかたちではなく，従来からのように雇い主の心遣いに従うのが自然だと藤田氏は説明する。

剣鉾のまつりが形式だけで受け継がれていくのではなく，まつりに関わる手続きや人間関係そして習俗なども含め，深くて広い京都の文化的な環境として引き継がれることが望まれる。

なお，本映像の制作に際し，一乗寺で鉾差しをされてきた渡辺修三氏のお話を聞くことができた。ここでは，京都の祭における剣鉾と，その巡行を担う鉾差しについての基礎的理解のため，インタビューの一部を収録している。

一乗寺の鉾差しの長老，渡辺修三氏へのインタビュー
（2013 年 4 月 10 日，福持昌之撮影）

クレジットタイトル

民俗誌映像「祭りに生きる　京都の鉾差し」 75分44秒

撮影期間　2011年5月～2012年7月
製作年　2014年
鉾差し　藤田　修　藤田智史　藤田圭亮　藤田隆平
（株式会社藤田造園）

鉾差し協力　粟田神社剣鉾奉賛会
一乗寺八大神社剣鉾保存会
大豊神社剣鉾保存会
北白川剣鉾保存会
吉田剣鉾保存会

撮影協力　春日神社　　春日祭鉾仲間連合会

須賀神社
株式会社聖護院八ツ橋総本店
株式会社八ッ橋屋 西尾為忠商店
本家八ッ橋西尾株式会社

下御霊神社　　讃州寺町のみなさん

鴨脚鷹子

特別協力　渡辺修三（一乗寺八大神社剣鉾保存会）

インタビュアー　大森康宏　　福持昌之
撮影・編集　井ノ本清和（株式会社エスパ）
制作監修　立命館大学映像学部教授　大森康宏
国立民族学博物館名誉教授
製作　京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会
（事務局・京都市文化市民局文化財保護課）

Disk-2 技術映像「剣鉾の組み方と差し方」

「剣鉾の組み方と差し方」について

福持 昌之・葛西映吏子

はじめに

京都市内には，剣鉾を伴う祭礼行列がいくつもみられる。ここでいう剣鉾とは，単に柄の先に鉾の刃（穂・剣）が取り付けられた鉾ではない。剣は象徴的な形に進化し，柄は棹と呼ばれ太くかつ長大化し，剣と棹の間には金属製のさまざまな飾りで装飾されている。剣を含めた鉾頭の重さは，数十キロに及ぶ。

このような鉾をまっすぐに立てて運ぶことは，さまざまな技術や工夫が必要であり，また，普段は解体して保管されるものだけに，組み立て方にも巡行に耐えうるよう工夫がなされている。これらは，剣鉾の製作時における設計上の問題にもかかるところであるが，むしろ実際の運用上の工夫として，巡行に携わる「鉾差し」

《表1》

八大神社		組み方　15分20秒	差し方　15分2秒
嵯峨祭	大門町		差し方　3分47秒
	中院町		差し方　4分5秒
	鳥居本町		差し方　1分3秒
	四区		差し方　3分30秒
	天龍寺地区	組み方　14分33秒	差し方　3分10秒
〔参考映像〕嵯峨祭			1分21秒
平岡八幡宮		組み方　9分22秒	差し方　7分56秒
鞍馬火祭	僧達仲間四本鉾	組み方　16分28秒	差し方　4分7秒
	名主仲間四本鉾	組み方　18分31秒	差し方　5分17秒
	下大惣仲間一本鉾	組み方　11分33秒	差し方　4分4秒
〔参考映像〕下大惣仲間 猿田彦の鉾の準備			3分58秒
〔参考映像〕鞍馬火祭			2分25秒

の人たちによって伝承されてきた現場の技術や工夫によるところも大きい。

本映像の階層・構造は表１の通りである。

差し方の違い

差し方のひとつは，東山系あるいは京鉾と呼ばれるスタイルで，左京区の八大神社から東山区の粟田神社にかけての東山山麓一帯の鉾差しの差し方である。これらの地域の鉾差しは，かつては植木職人などが中心になってグループを形成し，市内各地の祭に，鉾差しとして招かれて差していた。一乗寺の八大神社の祭礼では，地元の保存会の鉾差しによって剣鉾が差され，西院の春日神社の祭礼でも，この東山系の鉾差しが雇われて差す。本映像では，これらを代表して，八大神社での剣鉾の組み方，差し方を紹介する。

右京区には，梅ケ畑および平岡で伝承される差し方と，嵯峨祭に見られる差し方がある。前者は，平岡八幡宮の祭礼で，境内で剣鉾が差される。嵯峨祭は，愛宕神社と野宮神社の祭礼で，５地区から剣鉾がでて，それぞれ少しずつ違った差し方をしている。

由岐神社の祭礼である鞍馬火祭は松明が有名であるが，剣鉾も重要な要素である。鞍馬の場合，他でもよく見られるタイプの剣鉾（一本鉾という）よりもむしろ，３本の支柱を持つ四本鉾と呼ばれる大型の剣鉾が主役でかつ特徴的である。これは，４本の脚にそれぞれ１人がつき，４人で巡行する。

このように，京都市内の剣鉾差しは４つに大別されるものの，当事者である鉾差したちは，さらに細かい分類があると認識している。本映像では，嵯峨祭と鞍馬火祭については，その差異までも記録しようと試みた。また，東山系でも，一乗寺と藤田造園の差し方に差異があるというが，藤田造園については民俗誌映像で詳しく取り上げているので，ここでは記録しなかった。比較するには，民俗誌映像もあわせて参照していただきたい。

（福持昌之）

1 八大神社

組み方

八大神社の上一乗寺氏子祭では，地元の一乗寺八大神社剣鉾保存会の鉾差しによって，菊鉾，龍鉾，柏鉾の３基が巡行する。

柏鉾を例にとって説明すると，赤色の麻紐を使用して組む。まず，錺を棹に差し込み取り付ける。その際，錺の下に１つ，上に２つ輪状の座布団をかませる。まねき（剣）を差し込み，一度とっくり結びで固定してから，左右の錺に開けられた穴に紐を通して「ころして」止めていく。リン（鈴）をレイツリ（鈴吊り）に取り付ける際は，真っ直ぐに固定されるよう注意し，最後は男結びで止める。

別の細い紐を，とっくり結びにして棹に通し，最後の結び目を押さえ，錺にも１か所止めて再びレイツリの下で固定し，最後に男結びで止める。強く結び止めるが，強ければよいというものでもない。

差し方

八大神社の上一乗寺氏子祭では，地元の一乗寺八大神社剣鉾保存会の鉾差しによって，菊鉾，龍鉾，柏鉾の３基が巡行する。

〈練　習〉

練習用の基本ステップは三拍子で，慣れてくると二拍子にする。本来は二拍子であるが，その動作を大西邦夫氏が分析し，練習用に考案したものが三拍子である。カウント１で右足を踏み出しながら腰を落とし，２で腰を伸ばし，３で左足を前に出す。

１は腰を落とすための動作で，これが基本であり，最も重要な動作である。

二拍子は，カウント１と２が１つの動作となり，なめらかな動きになる。

〈基本の差し方〉

１歩目，右足を深く踏み込んで腰を落とし，１歩目は左足で前進するだけである。リン(鈴)は前と後ろで鳴り,左右交互に動く。

二拍子のステップの１でリンが前に当たり，２で後ろに当たる。最初にまねき（剣）がしなり，あとからリンがついてくる。真上に突き上げるような蹴りが足りないと，リンがうまく鳴らない。剣鉾を支えるには,「鉾を体の内に入れる」ことが重要で,そうすると手も体も楽で重さをあまり感じない。手の力で支えようとすると失敗する。手，上半身，下半身の力をぬき,「力をそいでいく」ことが大切である。視線は真っ直ぐ上を見る。

〈特殊な差し方〉

かつて今宮神社の剣鉾の巡行で使われたという「センボン」「ナナメセンボン」の技法は，千本通の市電の架線をくぐるための工夫から生まれた。粟田神社の剣鉾の巡行では，巡行路が長大で，素早く交替をしたいために,「アワタ」という技術が生まれた。

（葛西映吏子）

2 嵯峨祭

組み方

嵯峨祭では，５つの地区から剣鉾が巡行に参加する。

天龍寺地区の牡丹鉾は，紫色の紐を使用する。まねき（剣）の接続部分からとっくり結びでくくり，錺の留め具に引っ掛けて止めていく。裏も表と同じように止めたら，棹の部分に巻きつけて固定する。最後に輪をつくって結びとめる。紐がゆるんだときにこの輪を引っ張れば締まるようになっている。

牡丹鉾は，巡行当日には，鉾の額（錺受）の中央に，毘沙門天のご神体を飾る。

差し方

嵯峨祭では，巡行に参加する地区によってリン（鈴）の紐の長さや硬さが違い，紐が長くて硬いと，腰をひねって深く入れなければならない。コツは「上を向かずに正面を向いて差すこと」と言われている。剣鉾自体が鉾差しの身体とともに左右に振られ,リンは円状に弧を描いて剣鉾に巻き付くように打ち付けられる。１振りごとに１回リンが鳴る。

大門町の菊鉾，中院町の麒麟鉾，鳥居本町の澤瀉鉾，四区（西井頭町，井頭町，小渕町）の菊鉾の差し方は,「ふり足」という。１歩目は右足を左斜め前 45 度に踏み出し，２歩目で小さく飛び跳ねながら身体の向きを 90 度変える。股下 10 ～ 15 センチほどの比較的低い位置で，差し革で剣鉾を支える。

天龍寺地区（瀬戸川町・角倉町・龍門町）の牡丹鉾の差し方を「おくり足」または「なみ足」という。１歩目は右足を左斜め前に踏み出し，２歩目は１歩目に合わせながら身体の向きを 90 度変え，３歩目はその場で踏む。それら一連の動きを、鉾差したちは「振って止めて引く」と表現する。

（葛西映吏子）

3 平岡八幡宮

組み方

平岡八幡宮の秋季例祭では，４か町から剣鉾が出る。それぞれ，

町名をとって，中島鉾，一ノ瀬鉾，善妙寺鉾，平岡鉾という。

平岡八幡宮では，剣鉾を組むことを，「絡む」という。中島鉾の絡みを例にすると，まず剣を剣挟にはさみ，その上から紐を掛ける。紐は左右に２本ずつ出す。その剣挟を銛受，受金を貫通させ，両側から銛を差し込む。左右の紐は，銛の透かしの左右対称の位置を選んで絡めていく。紐は２本取りで，表側から裏側に通していくが，剣鉾によっては，表と裏にわけて絡めたり，表側の鋲に絡めたりする。

棹を取り付けた後，レイツリ（鈴吊り）の紐をつけ，最後に剣挟のところに房をつける。紐の色は，善妙寺鉾が白・紫・赤・黄・緑の五色，ほかの３つの剣鉾は赤一色である。

差し方

平岡八幡宮の秋季例祭の，４か町から出る剣鉾は，それぞれの町で鉾差しがおり，祭りの当日には境内を時計回りに差す。

鉾差しの帯は，嵯峨祭の帯と似ているが，ポケットの底には鋼が入っており，ポケットが広がるように成形されている。

鉾差しは，胸の前あたりで両手を揃えて棹を持ち，上体を後傾させることで，剣鉾との重量バランスをとる。このとき，脇を締めることが重要である。

左右交互に足を踏み出すため，リン（鈴）が左右に振れ，一歩ごとに棹にあたって音が鳴る。普通に歩くように差すのが理想的だという。

鉾差しの後ろには，吹散の端を持つ「絡み方」がつき，風の影響を受けそうなときは，捩じり巻いて抵抗を減らし，鉾差しを助ける。

（福持昌之）

4 鞍馬火祭

組み方

鞍馬火祭では，５基の四本鉾と３基の一本鉾が巡行する。特に四本鉾は両脇と後に支えの棹がつく巨大な剣鉾で，４人がかりで巡行する。ここでは，僧達仲間と名主仲間の四本鉾、下大惣仲間の一本鉾の組み方を紹介する。

〈四本鉾〉

僧達仲間が護持する虎の意匠の四本鉾（寺鉾）では，剣や銛を「親（親棹）」に取り付け，銛は麻緒の括り紐で固定する。リン（鈴）を取り付けた後，反転させて親の後側を上に向け，両側に「手棹」を苧の綱でしっかりと括りつける。続いて，後から支える「カリ（カリ棹）」を取り付ける。

苧の綱は手作りで，両端は穴に通しやすいように細くなっている。長く大切に使うため，同じところに力がかかって傷まないよう，毎回少しずつ位置を変えて使っている。

名主仲間が護持する葵の意匠の四本鉾（葵鉾）では，まず剣や銛を「親（親ボコ）」に取り付ける。銛は木製のくさびで銛受に固定し，括り紐をめぐらす。リン（鈴）を取り付けた後，反転させて親の後側を上に向け，両側に「ヨコ（横棒）」を括り紐でしっかりと括りつける。続いて，後から支える「カリ（突き棒）」を取り付ける。

僧達仲間の四本鉾と名主仲間の四本鉾は，棹と棹を紐で括るという古い形式をよく伝えているが，上大惣仲間，中大惣仲間，下大惣仲間の四本鉾は，改造によって金属製のジョイントで棹が連結されており，毎回取り付ける手間はない。

〈一本鉾〉

下大惣仲間は，四本鉾のほかにも紅葉の意匠の一本鉾がある。一本鉾は比較的小さな剣鉾である。組み方は，まず棹の先に受金，銛受を差込む。棹の先は剣挟のように二股になっており，そこに剣の茎を差し込む。「とっくり」にした黒い苧の紐を剣に掛け，剣の中ほどのふくらみの上で括り，紐は左右に１本ずつ出す。それらの紐は，銛の左右対称の位置を選んで絡めていき，受金の下で棹に括りつける。今度は，その紐を下から上へ銛に絡め，銛受の上で剣身の根元に結ぶ。その際，剣鉾を裏返し，結び目を裏側に作る。

リンを取り付ける腕木に，リンを取り付けたあと，再び表側を向け，吹散を取り付ける。取り付け位置は，鈴吊りのすぐ上である。吹散の下部は，棹に巻きつけて括る。

差し方

鞍馬火祭では，５基の四本鉾と３基の一本鉾が巡行する。特に四本鉾は両脇と後に支えの棹がつく巨大なもので，４人がかりで巡行する。ここでは，僧達仲間の四本鉾（寺鉾）と名主仲間の四本鉾（葵鉾）の差し方を紹介する。

〈四本鉾〉

僧達仲間が護持する虎の意匠の四本鉾（寺鉾）では，「オヤ（親棹）」と左右の「手棹」と後ろの「カリ（カリ棹）」を４人が支える。オヤが中心になって「オー」という掛け声で持ち上げる。下ろす時も同様である。巡行中は，組頭が先導し，「サイレイヤア，サイリョウ」の掛け声で揺らしながら進む。山門前で宿直仲間との諸礼が済むと，僧達仲間の四本鉾は，時計方向にまわって向きを変え，石段の高低差を利用し，石段の上の方へ鉾頭を倒してうける。

名主仲間が護持する葵の意匠の四本鉾（葵鉾）は，「オヤ（親ボコ）」と左右の「ヨコ（棒）」，「カリ（突き棒）」を４人が支える。オヤが中心になって「オー」という掛け声で持ち上げる。下ろす時も同様である。巡行中は，組頭が先導し，「サイレイヤア，サイリョウ」の掛け声で揺らしながら進む。巡行中は道幅いっぱいに広がって歩く。そのバランスをみるのはカリの役目で，「ハジカレ（広がれの意）」など、後から見て指示をだす。名主仲間は山門前の諸礼で，三歩半の礼がある。

〈一本鉾〉

下大惣仲間の一本鉾は，組頭と四本鉾の前を巡行する。また，一本鉾の前には，猿田彦の面をつけた鉾（剣鉾ではない）が先行する。鉾差しは，右手は高い位置で棹を持ち，左手は肘を曲げて腰の高さくらいで棹を持つ。「オー」という掛け声で持ち上げ，踏み出しは常に右足で，左足を引き寄せる。一本鉾は，歩くたびに微妙に揺れ，リン（鈴）がなるが一定のリズムは刻まない。また，剣の振幅も非常に小さい。御旅所などでは，立ち止まって，一本鉾を右足の先に接して地につけ，腕で前後に棹を振って，リンを鳴らし続ける。（福持昌之）

むすび

従来は東山系の鉾差しに対して，西山系ともいうべきもうひとつの差し方がある，という程度の認識しかされてこなかった。今回の剣鉾調査の過程で，平岡八幡宮と嵯峨祭では，差し方が異なることが明らかになり，４つのパターンの撮影計画を立案したが，撮影とそれに伴う調査を進めるなかで，東山系でも伝承してきたグループによって違いがあることや，嵯峨祭の５つの地区が２つもしくは３つの差し方にわかれており，さらに，かつては５つそ

れぞれ違いが際立っていたという話も聞いた。

もちろん，個人の体格や技量の影響も考えられ，個人差あるいは癖といったレベルの問題もあろう。しかし，どの師匠から習ったかという技術の系譜の問題があることも，明らかになった。そのため，本映像では，無理に４つのパターンにはまとめず，さらに細分化した映像コンテンツを収録することにした。

本来なら，差し方の系譜（師資相承）についてのインタビューも収録すべきところだが，今回はそこまで至らなかった。今後の課題としたい。（福持昌之）

クレジットタイトル

技術映像 「剣鉾の組み方と差し方」 145分32秒

撮影期間　2011年5月～2012年7月

製作年　2014年

協力　一乗寺八大神社剣鉾保存会

梅ケ畑剣鉾保存会

鞍馬火祭保存会
- 僧達仲間
- 名主仲間
- 下大惣仲間

嵯峨祭奉賛会
- 大門町
- 中院町
- 鳥居本町
- 四区
- 天龍寺地区

解説　福持　昌之　葛西映吏子

撮影・編集　井ノ本清和（株式会社エスパ）

制作監修　福持　昌之　葛西映吏子

製作　京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会
（事務局・京都市文化市民局文化財保護課）

マップ映像「京都の剣鉾差し」について

鈴木 岳海

はじめに

剣鉾とは京都の祭礼の神輿渡御行列の先頭を行き，道行を清める祭具である。歴史的には平安時代の御霊信仰から始まったといわれ，近代以前の伝統儀礼かつ芸能としての側面をもつ京都を代表する地域文化のひとつと考えられている。

一方で地域文化の記録映像は長らく地域メディアによっておこなわれることがあったものの，それらの映像が制作・上映・放送された後には，映像の閲覧など映像資料がアーカイブとして整理，活用されることは少ない。

しかしながら，近年では地域文化の映像アーカイブの構築の試みや，その意義が認められ，地域文化をどのように映像資源として記録し保存・活用していくのか多様な試みと議論がなされている。

そこで本稿では，地域文化の映像アーカイブの取り組みに関して，京都市内における剣鉾のまつりのマップ映像の制作過程を見ながら，専門家によらない映像アーカイブ化を目的とした映像制作の事例を示すとともに諸課題を明らかにする。

1 剣鉾マップ映像の概要と目的

本研究事例である剣鉾のマップ映像は，地図上での剣鉾のまつりの分布を見ながら剣鉾差しの映像を確認し，共時的な比較を可能とすることを制作の目的としている。比較の視座は以下４つにある。

1）市内各地の剣鉾を動かす「鉾差し」の技術を比較できる
2）市内各地の剣鉾の「鉾差し」が身に付ける道具と衣装を比較できる
3）市内各地の剣鉾が出される空間を比較できる
4）剣鉾の組立てを比較できる

また，映像記録の対象は，後述する５つに分類される鉾差しの技術と，衣装や道具，剣鉾のまつりでおこなわれる巡行における剣鉾の空間的な位置づけに関する諸特徴である。

2 映像制作の過程

1．2010 年，準備撮影

本プロジェクトは，京都市内で複数出る剣鉾を広くカバーする全数調査を基本とするが、この時点で剣鉾の存在が確認されている祭礼が約 50 か所あり，祭礼が同一日におこなわれ，かつ同じ祭礼でも異なる空間で剣鉾が出されることが多いことから，そのすべてを撮影するのは難しいと判断した。

そこで 2010 年９月末から始まった準備期間では，本格的に調査が始動する 2011 年春の撮影に向けて，点在する京都市内の剣鉾についてできるかぎり剣鉾のまつりの現状を映像で記録し，基礎情報の掘り起こしとその整理を主たる事業とした。撮影は，地域文化の担い手として地域住民を想定していたが，撮影機材の調達と機材操作のワークショップ等の必要性から，地域住民でもある立命館大学映像学部の学生を撮影調査員とした。

撮影にあたり，本研究プロジェクトの目的と方法，剣鉾のまつりの内容，撮影の対象，神社祭礼の流れ，作業工程などを中心とした説明会を開いた。制作される作品は，京都市内から 14 ヶ所，参考記

録として亀岡市でおこなわれている２か所の計16か所を対象に，荷鉾や居祭など鉾差しの形態に関わらず，剣鉾のまつりを撮影することとした。

説明会では，撮影方法についての解説もおこなった。カメラワークは固定画面を基本とし，１カット10秒以上の撮影時間を目安に，１日120分程度に収めることとした。また，撮影後は「現地撮影報告書」を作成し，映像のメタデータも記録することとした。

撮影調査員７名によって各地の剣鉾のまつりの様子が撮影された後，現地撮影報告書をもとに映像を確認した。そのなかで，これまで不明だった剣鉾のまつりを映像で記録されたことから，剣鉾と鉾差しの特徴，剣鉾が出される空間に関する基本情報を把握できた。

また，記録された映像に共通して見られたのは，剣鉾の鉾差しの動作と剣鉾全体がはいるフレームの映像と，剣鉾の意匠がわかる映像であった。鉾差しの動作については，鉾差しの全身や表情，特徴的な動きである腰から足の動きがわかるような映像が撮影されていた。

一方で，映像としては記録されているものの，祭礼がおこなわれた場所が特定できない映像や，祭礼に出る剣鉾のうち一部の剣鉾しか撮影していない映像，さらに剣鉾についても，その長さを理由として全景が撮影されていなかったり，特徴的な錺のみが撮影されていたりするなど，同じ剣鉾を対象としても，撮影者の選択によって映像で明示できる情報の幅にばらつきが見られた。

2010年秋では，プロジェクトの目的に合わせた撮影対象の選択にあたっては，荷鉾と居祭に加え，横に倒して複数人で運ぶ剣鉾を撮影の対象から除外することとした。また，剣鉾のまつりや鉾差しの動作に共通点と相違点を見いだせたことから，比較を可能とするアーカイブ映像の制作を2011年度の課題とした。

図1. ロングの映像，粟田神社

図2. 剣鉾の意匠，春日神社

２．2011年，第１撮影

2011年の撮影は４月末から始まった。2011年度の目的は，京都市内各地でおこなわれる剣鉾のまつりの比較を可能とするアーカイブ映像を制作することである。撮影対象は京都市内21か所にしぼり，春と秋に剣鉾のまつりをおこなう対象を撮影した。また参考記録として，荷鉾や居祭，横に倒して運ぶなど鉾差しの形態に関わらず，剣鉾のまつりをできる限り多くの事例を撮影することとした。

制作に先立つ説明会では，前年度の課題をうけて，前回同様の説明に加えて，次の３つの点について明示した。

ひとつは撮影ポイントである。どのような内容のカットを撮影する必要があるのか，主に巡行の様子がわかる場所，人，モノ，動作にわけられるのかを次のようにまとめた。

１）神社名が表記された看板，交差点名が記載された標識など撮影場所の明示
２）すべての剣鉾が一覧できる映像
３）剣鉾の全体と剣鉾の特徴的な部分
４）剣鉾を支える差し革や帯を含めた衣装

図 3. 撮影場所明示，八大神社

図 4. 鉾差しの足元，春日神社

図 5. 剣鉾の引き渡し，新日吉神宮

図 6. 巡行の行列，大豊神社

5）鉾差しの足の使い方
6）鉾差しの手元
7）剣鉾の上げ下ろし
8）剣鉾の引き渡し
9）巡行する行列の全景

つぎに撮影の技術的なポイントを以下のように設定した。

1）固定撮影を基本としたカメラワークと 1 カット 10 秒以上の撮影時間の確保
2）技術的に確認が必要な記録モード
3）行列を記録するのに適した 16：9 の画面サイズ
4）各自の美学的な視点は撮影者に任せた適正なショットの構図
5）記録媒体への記録と編集を考慮してビデオテープの最初の 30 秒に祭礼の情報を記載したタイトル用紙の撮影
6）できる限り編集時の負荷を減らすため上記の内容を撮影したうえで 20 分程度までに撮影時間を抑えること
7）3～4 分程度に編集すること
8）祭礼ごとに書き出すムービーファイルの設定（720 × 480 ピクセル，avi フォーマットか mov フォーマット）

を確認した。

さらに，この年は現地撮影報告書に加え，完成させた映像作品のカット表を作成することとした。また撮影に適する地点と巡行の時刻をあらかじめ確認するために剣鉾の準備に参加すること，手ぶれ防止のための三脚と夜の撮影ではライトを使用することも推奨した。

撮影調査員 5 名によって撮影された後，作成された現地撮影報告書をもとに上記の内容が記録されているか映像を確認した。編集は 2 段階で進められ，はじめに撮影調査員が第 1 次編集をおこない筆者とともに編集された映像を確認し，修正点を明確にした。続けて第 2 次編集された映像を筆者が確認して作品を完成させた。

前年度と比較すると，撮影のポイントを示した効果は予想以上に大きく，各撮影調査員による同じ内容を撮影した映像のばらつきが大幅に少なくなった。しかしながら，撮影調査員全員が剣鉾の準備に参加するなどの撮影準備の時間をとることができず，また撮影調査員のうち 3 人は初めて剣鉾のまつりを観察したこと，さらに前年度参加した撮影調査員も春の剣鉾のまつりに関する基本情報が少なかったため，祭りに即応できず必要な内容を撮影できない例も見られた。例えば，剣鉾の上げ下ろしや剣鉾が去っていく全体の映像や，剣鉾の全体を撮影できていない，また祭り全体の様子が記録されていないなど，撮影フォーマットをより詳細に設定するような改善の余地が残されていることが確認された。

撮影内容に関しては以下の 3 点をあらためて留意することとした。

1）差し方の技術を比較できるように撮影する
2）剣鉾を下ろして運ぶまで撮影する
3）鈴の鳴らしかたも含め，鉾差しの動作全体をいれる

撮影の技術上の課題としては，

1）剣鉾の錺を固定撮影する
2）映像の終わり方は映像と音をフェードアウトする
3）５分を基準として映像をまとめる

と整理した。さらに，中途半端な撮影を避け，祭礼の掛け持ちや無理な撮影スケジュールを組まないようにし，各神社と各剣鉾の重要な特徴を事前に認識することを必須事項とした。

３．2012 年，第２撮影とアーカイブ映像完成

調査撮影の最終年度となる 2012 年は，アーカイブ映像の完成を目指すこととなる。これまでに検討してきた剣鉾の鉾差しの形態については，鉾差しをおこなう祭礼を対象とした。そこで，再撮影が必要な 11 ヶ所と，すでに制作されている８ヶ所の計 19 ヶ所の剣鉾のまつりを最終的なアーカイブ映像の対象とすることとした。また，アーカイブ映像の公開を視野に入れ，映像を京都市内の地図上にマッピングし，html 上でクリックすると再生される形式のパッケージへの展開も図られた。

前年度までの課題から，新たな撮影フォーマットのもと撮影内容を確認した。撮影内容に関しては差し手を中心に撮影することした。また組立と巡行について，場所，モノ，人，動作を適切なショットで撮影することとし，以下のフォーマットを設定した。番号はそのまま作品構成の順番となるため，順番通りに撮影することで編集時の負担を軽減するようにした。

――剣鉾のまつりの映像撮影に関するポイント――

1）撮影場所の明示（神社名が表記された石碑や看板等）
2）剣鉾の準備の様子（剣鉾の組立，固定画面，複数の剣鉾の組み立てがある場合は，ひとつを選んで編集）
3）すべての剣鉾が一覧できる全景（剣鉾が集合した時）
4）剣鉾の全体（剣鉾から鉾差しが画面に入るショット， すべての剣鉾の意匠がわかるように撮影）
5）剣鉾の立て方（立てる前から次の動作まで）
6）剣鉾差し（鉾差しの頭，腕，足の動作がわかる構図）
7）鉾差しの手元と足元（剣鉾を支える手元，鈴を鳴らすステップの足元）
8）鉾差しの動作と剣鉾（鉾差しの動きから剣と鈴の動きを示すアップ）
9）剣鉾の前後の位置関係がわかる巡行行列
10）見せ所での剣鉾差し
11）特徴ある動き
12）鉾差しの装束（全身が入る構図）
13）剣鉾の手渡し（鉾差し同士で剣鉾を渡す一連の動作）
14）剣鉾のおろし方（剣鉾をおろし運び始める一連の動作）
15）剣鉾の運び方（鉾差し２人で剣鉾を担ぐ一連の動作）
16）行列の全景（画面奥に遠ざかる固定画面）
17）大豊神社，須賀神社，下御霊神社，嵯峨祭では各鉾町での剣鉾差し

撮影調査員５名によって，再撮影の必要な 11 か所の撮影がおこなわれ，前年同様，撮影調査員による第１次編集の後，筆者とともに映像修正箇所を明らかにし，第２次編集映像の確認を経て映像

が完成した。作品上映と講評がおこなわれた結果，映像については，クレジットと作品の字幕により場所の明示や，剣鉾のまつりにおける剣鉾の視覚的な位置づけ，剣鉾と他の祭具の混同を避ける必要など，映像制作のフォーマットに関わる提案がなされた。

3 アーカイブ映像制作の諸課題と対策

ここまで剣鉾のまつりを比較できることを目的としたアーカイブ映像の位置づけと制作過程を見てきたが，アーカイブ映像制作における課題がいくつか浮かび上がってきた。

ひとつは撮影以前の問題として，これまでの研究が少なく剣鉾に関する基本情報が少なかったことから，剣鉾の準備や当日の巡行，鉾差しの身体の動きを現場で確認する必要があった。とくに2011年までは撮影調査員が剣鉾の準備に参加するなどの撮影準備の時間をとれないまま撮影をすることになった。また，撮影対象との関係構築ができていないため，現場でコミュニケーションが取れず目の前で起きていることに即応できる態勢がとれていなかった。このことから，地域住民であっても映像制作においては，各神社，各剣鉾の重要な特徴を事前に確認する機会をもつとともに，関係構築の重要性があらためて明らかとなった。

つぎに撮影について，調査開始当初の2010年は撮影調査員の全員が初めて剣鉾のまつりを観察したことから，各撮影者の関心をもとに撮影されることとなった。剣鉾の様子を撮影するといっても，撮影する対象が絞り切れないことや，同じ剣鉾でも撮影者の切り取り方によって映像で明示できる内容が異なるものが多かった。なかでも，空間の明示や，映像の構図とカメラワークの違いなど，映像の記録の仕方が一様ではなかった。こうした課題に対応するためにおこなった撮影フォーマットの作成と，それをもとにした映像制作は，各撮影者の映像のばらつきを大幅に減らし，比較の視点を有するアーカイブ映像のあり方に非常に適していた。専門家によらない映像アーカイブの制作にあたっては，撮影フォーマットの設定が，そのプロジェクトの成否を決めるほどの役割を担うことが明らかとなった。

またこのフォーマットの設定においては，映像記録の確認が，新たな課題の発見を誘発することから，複数年に渡る継続した取り組みが必要となる。そうしたなかで，地域住民としての学生の可能性と，学生の参加によって受け継がれるこのような取り組みは，祭礼の記録としてだけでなく，学生にとって地域を知り新たな視座を獲得することができるとことから，多層的なメリットを持つものとも捉えることができる。

まとめにかえて

以上，本報告では剣鉾のまつりを対象として，地域文化の比較を目的としたアーカイブ映像制作について，制作過程で確認された課題を明らかにし，アーカイブ映像の制作に必要な事前の対応策と，撮影から映像作品の完成を見通した撮影フォーマットの設定の意義について述べた。

地域文化を映像化する取り組みは，依頼者側と撮影者をつなぐリサーチャーが必要であるが，実際には地域文化の研究者でありかつ映像制作もおこなえる人材は限られている。そのため，映像制作をおこなうのは，撮影業者に任せることが多くなり，地域住民がその担い手となることは稀であった。しかしながら，地域文化の記録化において，記憶や記録に住民が参加することの意義や，吉見が提示する文化の公共的な記憶が公共的な文化機関と草の根

レベルによる２つの取り組みの必要性（吉見 2010 : 159 - 179）に鑑みても，地域住民の役割が重要な位置にあることは明らかといえる。そのような意味でも，映像の知識や技術，経験をもつ専門家ではなく，住民が当事者となることを可能とするフォーマットの作成はその助けになると思われる。「記録，記憶の広場」としてのアーカイブ映像は，住民が地域の記憶や記録を共有し，社会に問題が起きた時に解決を促す源のひとつとなる。また地域の将来を担うであろう学生の参加にともない，アーカイブ映像が，地域と自らを見つめなおし未来に向かうために欠かせないものとして，その必要性が今後ますます日本社会に大きな比重を占めることとなると思われる。

本取り組みに見る地域文化のアーカイブ映像制作は，祭礼や映像の専門家ではない学生を対象とすることで，地域住民がプロジェクトに参加できる可能性を有しており，地域の文化を継承する試みとして，ひとつの事例研究となっている。

一方で，学生以外の地域住民との連携ができていない点が課題であり，実際に住民参加が可能となるかは今後の実践で明らかにしていく必要がある。また，アーカイブ映像を地域へフィードバックしていないため，映像から何が読み取られるのか，そしてどのような映像が必要となるのか抽出することも課題として残っている。

〈参考文献〉

・出雲路敬直 1971「剣鉾考」京都精華学園研究紀要 第９輯，pp.36-49
・大島新一　1988「鉾の出る祭とその歴史的背景―上御霊・下御霊両社の例祭に見える剣鉾とその氏子組織をめぐって」京都民俗 第６号，pp.57-95
・京都市文化観光局 1992『京都市の文化財』第８集，京都市
・鈴木岳海　2013「地域文化のアーカイブ映像における映像制作の諸課題について」立命館映像学 No.6，pp.63-78
・原田健一　2011「日常生活における映像と記憶の再構成―「地域映像アーカイブ」の理論―」人文科学研究（新潟大学人文学部）No.129，pp.65-90
・本多健一　2010「中世京都の祭礼における鉾とその変容―比較祭礼文化史のための基礎的考察」藝能史研究 第 189 号，pp1-15
・山路興造　2009「もう一つの鉾祭り」『京都　芸能と民俗の文化史』思文閣出版，pp.146-152（初出 1987）

〈参考資料〉

・赤坂憲雄　「広やかな記憶の場を」『日本経済新聞』2011 年 3 月 29 日
・京都市社会教育振興財団編 1986『京の祭の遺宝 剣鉾の伝統展』カタログ，財団法人京都市社会教育振興財団

〈引用文献〉

・吉見俊哉　2010「公共知の未来へ－デジタルの衝撃とメディア文化財」長尾真，遠藤薫，吉見俊哉編『書物と映像の未来－グーグル化する世界の知の課題とは』岩波書店，pp.159-179

クレジットタイトル

マップ映像　「京都の剣鉾差し」　87分17秒

監修・編集　立命館大学映像学部 准教授 鈴木岳海

製　　作　京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会
（事務局・京都市文化市民局文化財保護課）

①大豊神社（京都市左京区鹿ケ谷宮ノ前町）　4分29秒
2012年5月4日撮影

協　　力　大豊剣鉾保存会
粟田神社剣鉾奉賛会
一乗寺八大神社剣鉾保存会
北白川剣鉾保存会
吉田剣鉾保存会

撮影・基本編集　荒木秀仁　山本浩都　ユン・イエジン
北野昴介　加藤美花
（立命館大学映像学部生）

②八大神社（京都市左京区一乗寺松原町）　6分11秒
2012年5月4日・5日撮影

協　　力　一乗寺八大神社剣鉾保存会
粟田神社剣鉾奉賛会
大豊剣鉾保存会
北白川剣鉾保存会
吉田剣鉾保存会

撮影・基本編集　加藤美花　下泉咲穂
（立命館大学映像学部生）

③藤森神社（京都市伏見区深草鳥居崎町）　4分15秒
2012年5月5日撮影

協　　力　株式会社藤田造園

撮影・基本編集　荒木秀仁（立命館大学映像学部生）

④八瀬天満宮社（京都市左京区八瀬秋元町）　3分15秒
2011年5月5日撮影

協　　力　八瀬のみなさん

撮影・基本編集　堀内伸平（立命館大学映像学部生）

⑤須賀神社（京都市左京区聖護院円頓美町）　5分3秒
2012年5月13日撮影

協　　力　株式会社藤田造園

撮影・基本編集　下泉咲穂　広沢万葉
（立命館大学映像学部生）

⑥新日吉神宮（京都市東山区妙法院前側町）　5分9秒
2012年5月12日・13日撮影

協　　力　株式会社藤田造園
一乗寺八大神社剣鉾保存会

撮影・基本編集　池田佳史郎（立命館大学映像学部生）

⑦下御霊神社（京都市中京区御霊前町）　5分4秒
2012年5月20日撮影

協　　力　株式会社藤田造園
一乗寺八大神社剣鉾保存会

撮影・基本編集　北野昴介　高橋美也（立命館大学映像学部生）

⑧嵯峨祭（京都市右京区嵯峨野地域）　3分59秒
2012年5月27日撮影

協　　力　嵯峨祭奉賛会

撮影・基本編集　荒木秀仁　広沢万葉　高橋美也
（立命館大学映像学部生）

⑨三嶋神社（京都市東山区上鳥町）　4分26秒
2012年9月15日・16日撮影

協　　力　株式会社藤田造園

撮影・基本編集　北野昴介（立命館大学映像学部生）

⑩瀧尾神社（京都市東山区本町十一丁目）　3分35秒
2011年9月25日撮影

協　　力　株式会社藤田造園
撮影・基本編集　堀内伸平（立命館大学映像学部生）

⑪粟田神社（京都市東山区粟田口鍛冶町）　8分14秒
2011年10月7日・8日撮影

協　　力　粟田神社剣鉾奉賛会
一乗寺八大神社剣鉾保存会
大豊剣鉾保存会
北白川剣鉾保存会　吉田剣鉾保存会
撮影・基本編集　池田佳史郎（立命館大学映像学部生）

⑫北白川天神宮（京都市左京区北白川仕伏町）　3分13秒
2011年10月9日撮影

協　　力　北白川剣鉾保存会
粟田神社剣鉾奉賛会
大豊剣鉾保存会
吉田剣鉾保存会
一乗寺八大神社剣鉾保存会
撮影・基本編集　池田佳史郎（立命館大学映像学部生）

⑬平岡八幡宮（京都市右京区梅ケ畑宮ノ口町）　2分37秒
2011年10月9日撮影

協　　力　梅ケ畑剣鉾保存会
撮影・基本編集　堀内伸平（立命館大学映像学部生）

⑭三栖神社（京都市伏見区横大路下三栖城ノ前町）2分22秒
2011年10月9日撮影

協　　力　三栖のみなさん
撮影・基本編集　堀内伸平（立命館大学映像学部生）

⑮山國神社（京都市右京区京北鳥居町宮ノ元）　5分7秒
2012年10月13日撮影

協　　力　山国のみなさん
撮影・基本編集　池田佳史郎（立命館大学映像学部生）
鈴木岳海（立命館大学映像学部 准教授）

⑯春日神社（京都市右京区西院春日町）　5分23秒
2012年10月14日撮影

協　　力　株式会社 藤田造園
粟田神社剣鉾奉賛会
一乗寺八大神社剣鉾保存会
大豊剣鉾保存会
北白川剣鉾保存会
吉田剣鉾保存会
撮影・基本編集　池田佳史郎（立命館大学映像学部生）

⑰吉田神社末社今宮社（京都市左京区吉田神楽岡町）7分6秒
2012年10月14日撮影

協　　力　吉田剣鉾保存会
撮影・基本編集　北野昴介（立命館大学映像学部生）

⑱八幡宮社（京都市右京区京北上中町宮ノ谷）　2分25秒
2011年10月16日撮影

協　　力　上中のみなさん
撮影・基本編集　堀内伸平（立命館大学映像学部生）

⑲鞍馬火祭（京都市左京区鞍馬本町）　5分24秒
2011年10月22日撮影

協　　力　鞍馬火祭保存会
撮影・基本編集　鈴木岳海（立命館大学映像学部 准教授）

付　篇

- CG 映像制作の試みと課題について……古川　耕平　44
- 都名所図会に描かれる御霊祭の 3DCG による再現
  ……木峰　里沙　47
- モーションキャプチャーを利用した
  剣鉾の祭りにおける動きのデジタルアーカイブ
  ……高橋　美也　49
- クレジットタイトル ……51

本調査事業に調査補助員として参加した大学生が、卒業制作にあたり、剣鉾をテーマにしたＣＧ作品を制作したため、関係者の承諾を得て参考として収録した。

CG 映像制作の試みと課題について

古川 耕平

制作の経緯

これまでビデオカメラによる記録を主体とした伝統芸能や文化遺産のアーカイブがおこなわれてきたが，これらは基本的に現存する対象や有形物に有効な記録方法であり，失われた対象や動作など，無形物の記録には不向きなケースがある。CG をはじめとするデジタル技術を用いたいわゆるデジタルアーカイブは，これらの課題を解消しうる可能性を持つ。

今回の剣鉾巡行では，絵図に描かれた江戸期の巡行の様子や，鉾差しの足の運びなど，既に失われた光景や動作に着目し，これらを再現，記録する新たな手法として，3DCG やモーションキャプチャーシステム等のデジタル技術を利用し，アーカイブを試みた。

２つの作品の成果と関連性

今回作成した２つの作品は，連続している。「都名所図会に描かれる御霊祭の３DCG による再現」では，江戸期の剣鉾巡行の様子を，過去の絵図と現在の鉾差しの動作を参考に，可視化したものである。大まかにではあるが，動きをつけることで当時の剣鉾巡行の様子が再現されている。この際，鉾差しのキャラクターの動作は手付けで再現したため，正確なものではない。

これを踏まえ，「モーションキャプチャーを利用した剣鉾の祭りにおける動きのデジタルアーカイブ」では，鉾差しの忠実な動作の再現に特化し，記録をおこなった。特に足の運びに着目し，実際の鉾差しの動作を，そのままモーションデータとして３次元的に記録し，アニメーションに反映させている。将来的には，２つの作品の成果をブラッシュアップし統合させることで，動きを含めた，より精度の高い剣鉾巡行の可視化および記録が期待できる。

鑑賞上の注意

「都名所図会に描かれる御霊祭の３DCG による再現」では，江戸期の剣鉾巡行の雰囲気と，大まかな動きの再現が主な目的であるが，剣鉾の装飾や，参考とした『拾遺都名所図会』との比較なども合わせてご鑑賞いただきたい。

また「モーションキャプチャーを利用した剣鉾の祭りにおける動きのデジタルアーカイブ」では，モーションキャプチャーシステムによる動きの再現性に着目し，剣鉾巡行をはじめとする無形の文化遺産に対する本手法の可能性を感じていただければ幸いである。

文化財映像における CG の可能性／課題として残されたもの

今回の２つの研究成果は，どちらも伝統芸能における「動作」の再現が主な目的である。現時点で，詳細部分の作り込みや再現性の不足，リアルタイムビューワの実装ができておらず，今後検討していく必要があるが，これらを含め，上述したように最終的には２つの成果を統合することにより，より完成度の高いデジタルアーカイブが期待できる。特に３DCG は，動作との親和性が高く，複数人のアニメーションによる祭り全体の動きの再現や，布や炎の動きなどを忠実に再現する物理シミュレーションなどの活用によって，仮想的にではあるが，無形の文化財の可視化が可能である。

また，ビデオや絵図などの平面的な画像では補完できなかった奥行きを含めた３次元情報の記録が可能となる。

オリジナルの情報が失われつつある今，デジタルアーカイブは，あくまでもアナログであるオリジナルの情報を補足するものとし

て活用される。そのために，かつての絵師が絵図として遺した記録を基に，視覚的資料として，デジタル技術を用いた新たな絵図を描き，後世に情報の記録・保存・継承をおこなっていくことが肝要である。

都名所図会に描かれる御霊祭の 3DCG による再現

木峰 里沙

京都には剣鉾を用いた祭りが数多く見られる。剣鉾とは祭りの神輿渡御の先導を務め，悪霊を鎮める祭具である。それを男性が腰に装着した差し革などと呼ばれる帯に差し，上部に付いた剣を揺らし，リン（鈴）を鳴らすように練り歩く。古いもので貞観 11 年（869 年）の祇園御霊会創始の際，神泉苑に 66 本の鉾を立て，疫病退散の祈願がおこなわれたとされる記録がある。現在のような形の剣鉾がみられるのは室町時代からで，絵画資料では上杉本『洛中洛外図屏風』（室町時代末）に御霊社の剣鉾が巡行する様子が描かれている。京都市内でも約 50 カ所の神社祭礼に複数の剣鉾が出され，総数は 250 基ないしは 300 基ともいわれており，地域色豊かな貴重な民俗文化のひとつと考えられている。

しかし，かつて絵図に見られた剣鉾巡行の様子と，現在のものとでは，巡行の形式に違いがみられるケースがある。例えば，1787 年に発行された『拾遺都名所図会』に描かれている御霊神社の御霊祭の様子には，剣鉾を差した男性が巡行の中にみられるが，現在の御霊祭では剣鉾を差さずに，曳鉾の形式で運ぶ，または居祭りとして飾るだけとなっている。その原因として，電柱や電線，看板など，障害物が増加したことによる様々な危険性も挙げられるが，その結果，巡行の形式および鉾差しの技術継承が困難となりつつある。

以上の事例を踏まえ，失われつつあるかつての剣鉾巡行の様子を記録，再現することは，今後の剣鉾の継承に大きな意義があると考えられる。

本研究では，その足掛かりとして『拾遺都名所図会』に描かれた「御霊神事」の様子を３DCG でアニメーション再現することを試みた。当時の街並みや人々の装束，鉾差しの様子などの大まかな情報は絵図を見ることで得られるが，鉾差しの動作や，視点移動による表現をおこなうためには，３DCG による再現が適切である。

今回，作成した剣鉾巡行の３DCG アニメーションでは，剣鉾の詳細な形状や，鉾差しの装束のみならず，鉾差しの動作とそれに伴う音の表現，視点移動による新たな視点の追加などの演出を加えることで，巡行全体の様子を分かり易く視覚的にアーカイブすることができた。しかし今回のコンテンツにはデジタルアーカイブとして内包すべき情報量が不十分であるため，今後，テキスト情報や写真などを適宜追加していくことで，一層の充実を図り，また，それに合わせて本コンテンツのアーカイブとして有効性の検証もおこなっていく必要があろう。

モーションキャプチャーを利用した剣鉾の祭りにおける動きのデジタルアーカイブ

高橋 美也

「剣鉾」とは，京都や京都周辺の祭りで多く見ることができる祭具で，長い鉾の先に薄い真鍮の剣がついたものである。この剣鉾を差して街中を歩くことで，災厄をはらい，悪霊を鎮めるのである。鉾が祭りに登場するようになった歴史は古く，始まりは平安時代であるといわれている。

剣鉾の祭りは毎年行われており，近年では，各鉾で若手の鉾差しを育てる事に力も入れている。しかし，担い手が少ない為，複数の神社の祭りを同じ鉾差しの集団で担当している所や，祭りでの剣鉾の巡行を断念した地域もある。

このように鉾差しの教育は急務であるが，教える側の高齢化，新規の担い手の減少には歯止めが掛かからず，このままでは剣鉾巡行の大きな特徴ともいえる，足の運びなどの独特な動作の伝承が困難になる可能性がある。

そこで本研究では，現在おこなわれている剣鉾巡行，特に東山系といわれる鉾差しの動作を，特に足の運びに重点を置き，３DCG を用いたデジタルデータとして記録・保存する。さらに，実際の巡行の映像と組み合わせた分かりやすい動画コンテンツの制作を行い，剣鉾に対する一般市民の興味喚起や，後世への情報伝達などの一助とする。

そのためには，実際の動きに忠実に再現を行う必要があり，今回動作データを作成する際にあたり，VICON モーションキャプチャーシステムを利用し，正確なデータを記録した。

これまで，剣鉾に関わる動作データのアーカイヴィングはおこ

なわれた事例はなく，特にモーションキャプチャーシステムを利用した精密なデータの取得が出来たことは，今後の資料として大きな意義がある。

この動画コンテンツでは，鉾差しの祭りでの動作の中でも，足の運びを重点的に見せる演出をおこない，同時にアナログからどのようにデジタルになっていくかを分かりやすく表現した。

また，今回は作品を動画形式としたが，モーションキャプチャーシステムを利用して計測した3次元情報を最大限に生かすためには，マウスの操作に応じて任意の角度から自在に閲覧できるようにするなど，よりインタラクティブなコンテンツの製作をすることが望ましい。

しかしながら，このように実際の巡行の様子を撮影した動画と，モーションキャプチャーを用いた動画を組み合わせた映像は，インターネット等で公開することも可能であり，一般市民に向けた興味促進や教育的な活用などが期待できよう。

クレジットタイトル

ＣＧ映像「都名所図会に描かれる御霊祭の 3DCG による再現」 3分40秒

協　　力　御霊神社宮司　小栗栖元徳
　　京都市文化財保護課　福持昌之
監　　修　立命館大学映像学部 准教授 古川耕平
製　　作　立命館大学映像学部 木峰里沙
　　（平成 23 年度卒業制作作品）

ＣＧ映像「モーションキャプチャーを利用した剣鉾の祭りにおける動きのデジタルアーカイブ」 2分17秒

撮影・計測　下御霊神社 巡行 2012 年 5 月 20 日撮影
　　粟田神社 巡行 2013 年 10 月 14 日撮影
　　モーションキャプチャー 2013 年 11 月 3 日計測
　　（松竹撮影所Ｒ - 1 スタジオ）
協　　力　大西邦夫　　大西達也
　　廉屋皓三　　粟田神社剣鉾奉賛会の皆様
　　藤田造園
　　京都市文化財保護課 福持昌之
撮影環境協力　株式会社クレッセント 福島丘八
　　立命館大学映像学部 教授 大島登志一（副査）
監　　修　立命館大学映像学部 准教授 古川耕平
製　　作　立命館大学映像学部 高橋美也
　　（平成 25 年度卒業制作作品）

監修・執筆者一覧

監　修

大森 康宏　（立命館大学映像学部 教授
国立民族学博物館 名誉教授・映像人類学）

執筆者

大森 康宏　（ 同 上 ）
福持 昌之　（京都市文化市民局文化財保護課 技師・民俗学）
葛西 映吏子（関西学院大学大学院社会学研究科研究員・社会学）
鈴木 岳海　（立命館大学映像学部 准教授・映像人類学）

古川 耕平　（立命館大学映像学部 准教授・情報学）
木峰 里沙　（立命館大学映像学部 平成 23 年度卒業生）
高橋 美也　（立命館大学映像学部 平成 25 年度卒業生）

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編
京都 剣鉾のまつり
調査報告書　～映像編解説書～

発行日　平成 26 年 3 月 31 日
発行者　京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会
〒 604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町 394
Y.J.K ビル 2 階　京都市文化財保護課内
TEL：075-366-1498　FAX：075-213-3366
デザイン　自然堂（じねんどう）株式会社
印刷・製本 株式会社 谷印刷所